

音楽科

乗 富 章 子
今 井 直 人
橋 本 俊 彦

1 音楽科における知識創造とは

生活と音楽のかかわり

音楽は、私たちの日常のごく身近なところにあつて、生活に潤いを与える存在として欠くことのできない価値をもっている。音楽そのものを積極的に楽しもうと意識的にかかわる立場はもちろんだが、それ以上に大きな影響を与えるものとして、間接的にかかわっている音楽の存在がある。

BGMの影響
音楽と人の心理状態
音楽の潜在的価値

自然とメロディを口ずさむという行動は、音楽を楽しもうという意識よりは、楽しいという感情から派生して音楽という表現方法で気分を表していると理解できよう。また人は、聴取する音楽の趣向を変えることで作業効率を向上させたり、BGM (BackGround Music) の影響によって思考が左右されたりということもある。つまり、音楽が人の心理状態と深くかかわっていることは明らかで、音楽の潜在的価値といえよう。

音楽的スキーマ
音楽を表現・鑑賞するために必要となる経験と能力

学校教育における音楽（以下、音楽科）は、音楽と直接的にかかわる教科学習を中心にして、様々な楽曲に意図的に出会う場となる。子どもは、音楽を表現・鑑賞する活動を通して、音楽を感受する心を日々育てている。その心は、音楽的な技能の意欲向上にも深く結びつき、音楽の潜在的価値と融合することで、新たな音楽性として生きるものとなる。

音楽性の高まり

音楽科の活動を進めるには、子ども一人一人が音楽的スキーマをもち、音楽的な視点で友だちと積極的にかかわることでしか得られない気づきや喜びが大切となる。今日に至る個々の音楽的スキーマも、かかわりの中で培われたものである。

子どもは、音や音楽から感じ取ったことを周囲に伝えるために、きれいや美しいといった漠然とした感想から、音色や旋律のある部分がどのようだという楽曲に即した細かな感想まで、言葉によって多くを表現する。しかし、音楽性は、感じたことを言葉で表す力のほかに、音楽的な感受力や表現の技能、鑑賞の能力も合わせて求めることで高まっていくものである。言葉ではうまく表せないこと、それは、音楽そのものでかかわるしか伝え合えないものである。

音楽とかかわるプロセス

知識創造という視点で音楽科をとらえると、子どもは、音楽と出会うことで、何かしらの感想を抱き、それを互いに言葉や音楽で伝え合う中で、新たな気づきと自分たちなりの音楽が生まれてくるといえる。一人一人が音や音楽に対して主体的に向き合い、友だちの表現するものを意識し、何かを感じ取るだけで、新たな知が生まれる。その繰り返しが、音楽性を高めることに結びついている。

以上のことから、音楽科における知識創造を以下のように定義する。

音楽科における知識創造の定義

様々な音や音楽に自分なりの感じ方で向き合い 互いにかかわり合う中で
自らの音楽性を高めていく営み

2 音楽科における「かかわり」の活性化

汎用テキスト

多くの音楽には楽譜や音素材（範唱や範奏、友だちの表現など）という汎用テキストが存在している。子どもは、このテキストをもとにして、互いのかかわりの中から自らの音楽性を高めていこうと試みている。同じ楽譜であっても、音階

読譜力のレベル
感じ方の個人差

やリズムを正確に表現できるようになる段階から、音楽の規則性を把握して、音楽的スキーマをもとに楽譜の行間を推察できる段階まで、個々の読譜力に差異が生じる。また、同じ楽曲を聴いても、感じ方に個人差が存在することから考えると、音楽の魅力や感受の多様性と向き合うために、相互にかかわることは不可欠である。

音楽科における「かかわり」の活性化とは、汎用テキストをもとに、互いの表現（言葉によるもの、音楽によるもの、空気を伝わって感じるものすべて）から新しい刺激を得ながら、自らの表現に活かそうとしている状態ととらえる。受け手となって刺激を得ようとする立場ではなく、活発に自分を表現する立場となることで、自らの音楽的な高まりや深まりにつながるものと考えられる。

音楽的な高まりや深まり

3 「かかわり」を活性化するために

子どもが、音や音楽により主体的に向き合い、様々な表現を出し合える環境を求めて、以下の視点から「かかわり」を設定する。

(1) 楽曲との出会いを大切にす

楽曲との出会わせ方

楽曲との出会いは、とても大切な瞬間である。そのため、指導者は、子どもに楽曲を提示する際、どのような授業スタイルをもって楽曲を提示することが、子どもにより深い印象を与え、音楽活動への興味・関心を引き出すことにつながるかを吟味することが必要である。子どもが楽曲の世界に入り込みやすくするため、写真・資料の活用や楽曲にかかわるエピソードなどを紹介する。それは結果的に、以後の音楽活動における「かかわり」に、質的にも量的にも大きく影響を及ぼすものであるからである。

写真・資料の活用

(2) 音や音楽で表現する力を育てる

音楽技能の習得

楽曲を歌ったり、演奏したり、創作したりという音楽表現は、音楽科の中心となる活動である。子どもは、歌い方や楽器の演奏の仕方、読譜に必要な知識を理解する力を身につけることで、音楽のおもしろさや美しさなどをより味わうことになる。そのため指導者は、子ども一人一人に表現させ、個別に支援を加える場を設け、それを同時に、個々の表現の良さを互いに聴いて認め合う場とする。これは、自信を持って表現できる環境整備であるが、内面の「かかわり」でもある。また、友だちの表現に興味を持って、友達の表現について、表現方法のコツを聞いたり真似して表現したりすることで、相互に音楽性を向上させる。そのうえで、みんなで音楽を表現する活動をもって、音楽科の魅力であるともに表現する喜びが共有され、音楽科でしか味わえない響きによる「かかわり」が生まれる。

良さを認め合う場
内面の「かかわり」

ともに表現する喜び
響きによる

「かかわり」

(3) 評価しながら聴く力を育てる

説明できるように

聴く力

楽曲や友だちの音楽表現を聴く際は、「どこ（何）が、どんなふうだ」、「もっと、どこ（何）をこんなふうにしたらどうだろう」という言い方で、友達に説明できるように意識し、楽曲を評価して聴き取らせる。それは、子どもにとっては主観であっても、楽曲を特徴付けている諸要素を感じ取り、それらの関係や楽曲全体との関係を理解することにつながっている。自分の感じ方を言葉で伝えるためには、それ相応の語彙力が必要となってくるために、音楽活動を繰り返す中で、音楽を言葉で表す場を発達段階に応じて設け、その蓄積を図る。ただし、純粹に音楽を身体全体で味わうという聴き方も大切であることから、すべての場で説明できるように聴かせるという考え方はしない。

音楽に必要な語彙力